

# 余市の人々。 第10回 【江部拓弥】

戦略推進マネージャーの連載を広報誌で掲載しています！

タイトル「香川」

「りんごもなかは余市に名物をつくろうと、父親が考えたんですけどね。ほら、そこに新聞の切り抜きがあるでしょ」

そう言って、香川さんは壁に飾られた額を指し示す。木枠の額縁の中に何枚かの写真と、新聞の切り抜きが収められていた。

「りんごもなかを売り出したとき、北海道新聞が取材にきたんです。切り抜きはあっても日付がないから、はっきりとしたことはわかりません」

よく見れば、切り抜きの端っこに、手書き文字で昭和35年とある。

「ああ、そうなんです。写っている女の子は私の妹なんです。妹が言うには、取材は小学校3年のときだったと。だから、昭和35年のはずだと。そういうわけなので、昭和35年でいいと思いますよ」

いいと思いますよ、という物言いがなんだかおかしい。店の名物であり、町の銘菓でもあるりんごもなかを、喧伝することも誇示することもしない香川さん。饒舌ではないけれど、口数が少ないわけでもない。愛想を振りまくわけではないが、無愛想ではない。飄々として、どこかユーモアが漂う。職人だなあ。香川さ

んを目の前にして、僕はそんなことを思っている。

りんごもなかの包装紙を開けると、りんごの形を模した最中が現われた。おお、青りんごだ。かじる。パリッとした皮の食感の後に、あんこの甘味が口いっぱいに広がる。ほのかにりんごが香る。おいしい。中身のあんこは白あん。さわやかな後味に、名物たる所以を知る。

白あんなんですね、と香川さんに話をふれば「こしあんもありますよ」。青りんごなんですね、と再び香川さんに話をふれば「ふつうのこともありますよ」。続けて「ピンクもありますよ」。なんとなんと。バリエーションの豊富さに驚く。60年にわたって愛される理由を垣間見る。

「青りんごの最中には酸味を入れようと思ったんです」

ふと、香川さんが言う。視線は僕が頬張る青いりんごもなかだ。

「でも、結局、入れませんでした」

そう言ったきり、香川さんは黙って微笑んでいる。どうやら、青りんごの最中の話は、これにておしまいのようなのだ。香川さんの間合いは独特で、楽しい。

(続く)

※「余市の人々。」は、余市町戦略推進マネージャーの江部拓弥（えべたくや）さんが、余市町に関わりのある人物へのインタビューをもとに執筆し、「WEB本の雑誌。」(<https://www.webdoku.jp/column/ebe/>)に掲載されているものを、転載しております。※掲載日 2020.9.30

問合せ 企画政策課 企画グループ ☎21-2117



## 都市計画の変更に伴う図書を縦覧に供しております

都市計画の種類 余市都市計画道路の変更

縦覧の場所 北海道建設部まちづくり局都市計画課および余市町建設水道部まちづくり計画課

問合せ まちづくり計画課 まちづくり建築グループ ☎21-2124